

杖老人の一日

井上清彦

目を覚まし、ころばないように慎重に2寝室から1階の居間にやっとたどり着く。朝日を受ける薄い白のカーテンには、隣の家が影絵のように揺れている。

きょう7月10日は、4回目の新型コロナワクチン接種の日だ。午後2時20分の指定だ。参院選の日程があとから決まり、同じ7月10日になった。「ラッキー」と思わず叫びたくなった。



ワクチン接種会場は「桃井原っぱ公園」だ。公園の角に、杉並区が急遽建てた建物だ。戦前は中島飛行機発動機の戦闘機エンジン工場があったところだ。戦時中米軍の空襲を恐れた父の判断で、私は母の故郷である、佐渡島に疎開した。ただ昭和17年4月生れの私には、疎開した記憶はほとんど残っていない。終戦後は、富士精密工場に代わり、以後変

遷はあった。糸川博士のペンシルロケットもここで生まれたという小さな記念碑がある。

参院選の投票場所は、私が卒業した小学校だ。創立147年を迎える区内でも歴史のある母校だ。3週間前の杉並区長選もここで投票した。原っぱ公園も小学校は家の前の道を西側に歩いた同じ道筋だ。

さて当日、まずはワクチン接種と準備を始める。例によって支度に時間かかり、先週わかった腰椎の圧迫骨折もあり余計時間がかかる。

何事も先へ先へと行動する妻の性格からみると「見ているといらいらすわ。そんなもの持って行かなくいいのよ。」早く出かけないと間に合わないわよ」と畳みかけてくるだろう。今更だが、妻との時間感覚のずれがいさかいの原因だ。歳を取り歩くスピードが妻より遅くなった時が、立場が逆転する分岐点だった。



桜の季節に地域大学同窓会のスケッチ会が新宿御苑で開催された。久しぶりに会った1年先輩と絵を描くのを忘れて話し込んでしまった。そのなかで、彼も奥さんより歩くのが遅くなってしまったとはなす。「奥様とは何歳違いですか」「4歳です」、「うちも同じです」、「どこも似たようようですね」

さて、ワクチン会場へは、杖をついての歩みで、想定より時間がかかり、結局時間ぎりぎりだった。会場では、杖での歩行を見て、スロープからの入場となり、転倒予防を考えてか、「車いす」に載せられしまった。その方が係の人にとっても安心で、やりやすいのだろう。初めての「車いす」体験だったが、乗りやすく快適だった。家に帰ってその話をしたら、「ほんとうにそうになってしまおうわよ」と一蹴された。係の人は、帰りを心配して「タクシーをお呼びしましょうか」、「いえ、結構です。帰りは参院選の投票に行きますので」と応えたが、それでも心配そうだった。

参院選投票は、2日前の安倍元首相銃撃事件直後の緊迫感もなかった。また、接種会場のような杖老人に対する気づきはない。校庭にある、生徒が育てている、朝顔やゴーヤが以前の区長選の時と比べ成長が遅い。6月中に梅雨明けしたり天候がいつもと違うのか。自宅の庭からの、カマキリの訪問もなく、妻が楽しみにしている善福寺川のカルガモの雛も見当たらない。



投票を終えた後、例によって「道草」の虫が動いて、ごひいきの地元の書店「タイトル」に立ち寄ってしまった。

魅力的な本がたくさんあって見ているだけでも楽しくなる。長居は禁物だと、帰宅を急ぐ。案の定、途中で妻からラインと電話がかかってきた。「どこにいるの」、「早く帰りなさい」だ。こうして杖老人の一日が終わった。家では、特製のコルセット生活を余儀なくされている。